

出会いを力に！

ジョージア大学 ポスドク研究員・東京女子大学 非常勤講師

林 安希子 (はやし あきこ)

私の人生の転機は、2002年7月、ジョセフ・トビンという一人のアメリカ人研究者に日本で出会ったことでした。この出会いによりアメリカ留学と博士課程進学への道が開かれ、2005年8月からの8年間をアメリカで過ごすこととなりました。

留学先のアリゾナ州立大学大学院では、そのトビン先生に師事し、心理学部のナンシー・アイゼンバーグ研究室でリサーチアシスタントとして働き始めました。トビン先生は文化人類学者で、3カ国の幼稚園の比較研究、5カ国の移民の子どもたちの比較研究をされ、毎月のようにフィールドワークに出られていました。アイゼンバーグ先生は、感情・社会化の発達研究の第一人者で、子どもの自己制御に関する縦断研究を手がけていて、先生もまた毎日のように実験をされていました。

研究に邁進されるお二人の先生を間近にみて、私は瞬間に研究の魅力にとり付かれ、トビン先生が録音してきたインタビューを聴き漁り、アイゼンバーグ研究室の実験に入り浸りました。修士課程の時に専攻していた文化心理学から、発達心理学、教育心理学、教育学、文化人類学と学びを広げていきました。まさに学際的な面白さに目覚め、一つのテーマに様々な方法でアプローチする醍醐味を知った時でした。博士課程進学当初に抱いていた文化と感情への漠然とした関心から、「私は、子どもや教師といった人間が、社会の一員・文化の一員になっていく過程とそこに文化がどう関わって

るのかに興味があるのだ」と、興味の根源を発見した気がします。

私にとって、留学生活と研究は次第に切り離せないものになりました。両親共に東京出身の私は、毎年田舎に帰郷する人が幼少の頃から羨ましく、私には故郷がない、と淋しく思っていました。アメリカに留学して初めて、「私の故郷は東京だ」「私は日本人だ」とある意味当たり前のことを実感しました。日本を離れ、距離を置いて母国を見ることで、日本・日本文化を様々な国・文化の中の一つだと捉えるようになりました。これらは、比較研究で日本を取り扱ううえで重要な視点だと思います。また、多くの留学生と共に授業を受け、研究プロジェクトに参加し、講師として、中国、トルコ、フランス、アルゼンチン、ケニアなど各国からアメリカに来ている教授・学生と一緒に働きました。毎日の生活が「異文化理解」「多文化共生」であり、その中での「他者理解」でした。そんなエスノグラフィの毎日とも言える日々で、学問的にも、文化人類学、エスノグラフィ（質的研究）に魅了されていったのかもしれませんが。

博士論文では、日本の幼稚園教諭がどのように子どもたちの情緒・社会性の発達を支援しているのかを探究し、「見守り」「思いやり」「けじめ」などの重要性和その教授法を示しました。これから出版される本では、日本の幼稚園教諭の教授法を「心と体」の概念から、頭で考えていることと実際に体で行動していることの連結を



Profile — 林 安希子

2004年、東京女子大学大学院現代文化研究科修士課程修了。2011年、アリゾナ州立大学 教育学部博士課程修了。博士号取得。専門は比較教育、幼児教育、文化人類学、質的研究法。著書は *Teaching Embodied: Cultural Practice in Japanese Preschools*. (共著, The University of Chicago Press より2015年刊行予定)。

考察し、今後の研究では、日本・アメリカ・中国の幼稚園教諭が熟練教師になる過程を検討したいと思っています。これら一連の研究は、「社会化・文化化」という観点から、他文化だけでなく自文化をも距離を置いて事象を分析する点で繋がっています。私のこれらの関心や方法論は、留学生活を通して築かれたと思います。

留学生活では、学問・文化・人々と、多くの出会いがあります。一つひとつの出会いを大切に、それをチャンスと捉えて、自分の力にする努力をし、上手いかなければ、相談する。わからないことがあれば、尋ねる。困った時には、助けを求めます。そして行動で示すことを心がけました。母語・母国だったらもっとできたのにと感じる時は、仕事を人の2倍、3倍もしました。これから留学なさる方、ぜひ、多くの出会いを力にしてください。アメリカにはその環境とシステムが整っています。多くの方に、多くの出会いがあることを祈っています。